産業観光
きりゅう紀行 111

保存への機運高まる 地球にここだけの花

カッコソウ

カッコソウは地球上で桐生、みどり両市にわたる鳴神山系にのみ自生するサクラソウ科の植物（学名：Primula kisoana var. kisoana）で、5月ごろになると可憐なピンクの花を咲かせる。かつては、山一面がピンク色になったと言われるほどたくさん見ることができたが、近年では採取や生育環境の変化により、その自生地が減少し環境省のレッドリストの絶滅危惧種に選定されている。2012年にはその稀少性の高さから、「絶滅のおそれのある野生植物の種の保存に関する法律（通称：種の保存法）」の国内希少野生動植物種に指定された。

カッコソウの減少については、愛好家や園芸業者による採取や生育適地の減少、林道や作業道の延伸や林業施業による環境への影響などが主な要因とされ、2012年の時点で自生地における生育数は800個体程度と考えられている。様々な問題の中、より深刻なのは「遺伝的な多様性の消失」であるという。種子繁殖ができにくくなることで、遺伝的な多様性を保つことが難しくなる。クローン成長により成長した株は、すべて同じ遺伝子であり寒さや病気への耐性が低く一気に全滅する可能性もあるため、カッコソウを保全していく上で遺伝的な多様性を守ることも重要な課題とされている。

一方で、カッコソウを保全しようとする機運は年々高まっている。多くの個人や市民団体が精力的に保護や育成に向け活動しており、2014年には「カッコソウ協議会」が発足した。桐生市においても、登山者への啓発や自生地のパトロール、調査・啓発活動を群馬県や警察、市民団体と連携しながら行っている。また、荒木恵司桐生市長はカッコソウを桐生の自然環境のシンボルに据え共通ロゴの作製を検討しているほか、桐生商工会議所ではマフラー・ストールのブランド化事業に取り組んだ際、カッコソウをモチーフにブランド名とブランドロゴを作成した。

180万年前の氷河期を乗り越え咲き続けるこの山野草は、世界に誇る地域の宝としてこれからも守っていく必要がある。

（参考：桐生市HP）